



中村俊定文庫
文庫 18
131



梅さくら

朱控

梅松と争

男色と女色との上を争ひ
さして世情を憂へしは
ものゝしき事なり
此の世に
能く争ひしは
能く争ひしは

111

子にわしてひさしめし此
郷よりあつめりまゝに
やまらふして雨あはれに
其階之氣をよかひか
ゆいふあふ家へし
王中より松樹聖念
り松くりのこゝろに
ものゝろの舞女のこころ

芭蕉菴の梅の香のあ
おひきかきしつゝ人のあ
のなをみるもあはれ
心もあはれあはれ
梅のこころ異國のあはれ
梅のこころあはれあはれ
梅のこころあはれあはれ
梅のこころあはれあはれ
梅のこころあはれあはれ

梅のつと日の出る山は
しるしおぼゆるお花屋
下のおぼゆるお花屋
くらおぼゆるお花屋

よせの花屋 菊屋



梅のつと日の出る山は 芭蕉

東叡山

梅のつと日の出る山は 其角

尾張のぬり

梅のつと日の出る山は 丈草
梅のつと日の出る山は 惟然

梅

田

葛城やまも香をよめ梅の
 鶯の舌もきこゆる山は
 痛もてし香も梅の思ひ
 花をよも花はよめし家梅
 梅も酒もつきては梅
 牡丹もくもやめんと梅
 こ月の梅ていあこり梅
 立印の本たてしる梅

京 風國
全 九北
全 去來
江 山嵐
膳所 正秀
京 湖春
伊勢 支考
江 孤屋

追風もたぬ梅のわん
 作らぬ又梅の山さ
 山さや梅のふ
 食の付はあつ梅の山さ
 かよの梅も泥の上平や梅の
 美午梅のやらの梅の山梅
 火うち梅の梅も梅の力
 梅さく次家も梅の昔

江 我
豊前中津 道香
伊賀 土芳
江戸 野坡
大津 乙州
豊後日田 菊人
膳所 探芝
四方郎 朱拙

とりの酒九方カの上や梅の花 大津尼 智日
屋かこ船上カの梅散カきり 江戸 杉風
梅散カや北カ目カはカ敷カ立カ系カ糠カのカ塚 日田 里仙

梅のあらしの

松明ゆてえカまカし 梅の松全家 全 芝角
とちカあカらカぬカんカこカ梅カや梅カの全花 全 独カ々
はカはカまカるカ外カ側カの梅カや梅カの全花 全 若カ芝
梅カのカあカまカ持カ後カかカこカらカ 加賀 北カ枝

梅

松江戸るカあカたカまカかカらカや梅カはカら 江戸 松風
梅カのカあカ印カの梅カあカのカよカきカぬカ 勝前 曲水

よしの田と人あまのうら

うりカくカいとカまカるカ山カのカ梅カ 日田 紫道

松中の歌

氣カ晴カや水カと系カ儀カのカあカめ 全 幽泉
願カのカあカらカ坊カをカや山カ梅 全 山カ之
氣カのカ肩カをカあカせり梅カの花 江戸 史邦

石佛日田いぢま日田池日田や日田やす日田梅日田 雲日田柱日田

ち度の路日田

美由系

池日田く日田り日田も日田敷日田る日田美由系日田梅日田い日田 路日田通日田

里坊日田の日田確日田は日田つ日田や日田め日田ゆ日田め日田の日田花日田 昌日田房日田

何日田もの日田う日田皮日田剥日田ら日田ぶ日田ら日田出日田る日田 釣日田壺日田

白日田ひ日田よ日田り日田ひ日田と日田き日田勤日田く日田ら日田何日田梅日田 吐日田筆日田電日田

大日田き日田く日田き日田物日田ん日田せ日田く日田梅日田を日田 何日田水日田

梅日田く日田よ日田は日田ふ日田く日田ま日田あ日田ら日田ひ日田き日田ら日田 游日田刀日田

碓日田の日田碓日田く日田ら日田く日田ら日田や日田山日田は日田く日田 也日田水日田

く日田ら日田ぬ日田め日田の日田白日田ひ日田碓日田系日田や日田く日田ら日田の日田梅日田 沙日田多日田

陶日田の日田土日田と日田れ日田あ日田ら日田や日田山日田の日田梅日田 座日田籠日田

以日田本日田部日田屋日田の日田北日田の日田陽日田や日田梅日田の日田花日田 曾日田良日田

こ日田つ日田き日田ら日田と日田碓日田は日田な日田梅日田の日田一日田と日田碓日田 谷日田ト日田

つ日田き日田ら日田み日田え日田と日田た日田お日田あ日田ま日田き日田梅日田の日田 万日田草日田

山日田野日田あ日田や日田あ日田え日田く日田ら日田と日田碓日田は日田 桃日田園日田

ぬ日田き日田ら日田な日田ら日田梅日田の日田ほ日田ら日田梅日田の日田花日田 中日田津日田 平日田水日田

風

おらほさきと異なま風や核を 江戸 刺牛
 石核の日は事きく陰の東川 義濃 如坊
 山こころもとと他事や核 田主丸 香路
 核のあ志はく近々も自の上 江戸 亀翁
 なるるえなみの核やは 豊後 也赤
 おて核 江戸 徳
 あり 江戸 横凡
 へ 江戸

海

藏建家室のよるや初 玖珠 琴弓曲
 こそこの核 日田 隆元
 駕もぬし 大坂 之道
 山 日田 之遊
 核 中津 西幽
 ひと 江戸 山石翁
 山核 日田 桃水

庭はらむを曲らば 振の遠家 中津 笑吟
 ちねんをうつらふともあふ 振 江戸 巴風
 振るや命工友のまゝし 筑前 閑父
 ちねんを垣ゆむや 振の流 中津 加能
 振将何一筋の上を 日田 重時
 さし(は)てし 振るや 振の暁 全 西六
 その中を思ひ流し ちねん 振 江州 許六
 ちねんをの屋根をさした 振 日田 市六

物振傳へたきこふる 振 全 茂市
 ちねんの筆のこ 振 江州 小由
 石壇を子羽織を引く 振 日田 野五
 ちねんの中へ 振 中津 白水加
 ちねんを引く 振 秋珠 執徳谷
 ちねんを引く 振 黒崎 鹿子
 ちねんを引く 振 筑後 猿鷗
 ちねんを引く 振 秋珠 曲風

魚匠の形はけりや庭のいと様 玖珠 獲跡 伊賀
 之をくまんと様を喰はたあらぬ 日田七人 猿籠 伊賀
 飲酒戒絶て様のおくま路は 吉井 西國 伊賀
 様さのみ未出所まのしを多隠 吉井 桂山 伊賀
 庭はけりも慰まふは様おれ 筑前志波 尾頭 伊賀
 様うのしをいれはるる家 中津 岡重 尾張
 様色天狗一殿をたまたま免 尾張 吐雲 尾張
 こもは庭や様の白ひの影 尾張 石浜川

天狗一殿

こがしぬ家白湯を二重の様哉 江戸 普叙 目田
 様さるるや水楊枝を噛み 全 催風 全
 山様さるる見ても有る何 全 一 全
 之をらや眼を仰はは様 全 様岸 全
 様くまんと乳出の消や南 筑後 呼牛 筑後
 様さるるや宮古共毛 伊賀 淮物 伊賀
 おてをく庭の様を月の新 伊賀 一刀字 伊賀
 様さるるや猫の 筑後 法道 筑後

路より又女のありことと思ひ
 朝シホカヒクモもとのゆらりも物もなほむ
 うはくは境雲はゆめ記晴
 長くはるのそとにありあ
 賑はとつて遊をまがてけり
 牡丹のゆめの入つてく
 ともやふ後を求めもめ
 こころの女メめも福もものメ

あり
 風
 物
 里心
 美芝
 香花
 也
 心之

通くは味はつたは酔倒
 女つてはつたは酔倒
 うつとほつたは酔倒
 路をのぞくは酔倒
 堤柳の片は酔倒
 白雲を告は酔倒

前
 香
 度
 惟
 祖
 朱

柳橋

そまのま^ひおの^りおま
中はま^ひ水^まま^ひま^ひま^ひ
細^ひ法^まの^ひつ^まあ^ひま^ひま^ひ
総^ひれ^まの^ひあ^ひま^ひま^ひ
ひ^ひ法^まゆ^まま^ひま^ひま^ひ
福^ひ福^まま^ひま^ひま^ひ
河^ひ海^まま^ひま^ひま^ひま^ひ

い^ひ家^まま^ひま^ひま^ひま^ひ
の^ひ他^ま法^まま^ひま^ひま^ひ
ま^ひま^ひま^ひま^ひま^ひ

朱^ひ北^ま

海^ひは^まこ^ひや^ま苗^ま代^ま水^まの^ひち^まよ^まま^ひま^ひ
丸^ひ口^まあ^まま^ひま^ひま^ひ白^ま魚^ま
陽^ひま^まの^ひ原^まま^ひま^ひま^ひま^ひ
は^ひま^まま^ひま^ひま^ひま^ひま^ひ
清^ひま^まま^ひま^ひま^ひま^ひま^ひ
ま^ひま^ひま^ひま^ひま^ひま^ひ

水^ひ北^ま北^ま北^ま
水^ひ北^ま北^ま北^ま

あま

盆ウあちのちの大籠を張れ
 清ユきんのぬき埋土のうへ
 あまを南ミナミの山に隠へさばくと
 かりーと家より元々まふ如美
 面白ウツクシい山あふのはるをさるをよ
 昔ウラあをさおちこむ河豚の腹
 城シロ下をさんそを次々を危
 下シタの家合事イハヒの風よほさく

此此此此此此

梅ウメ花ハナの空をちよぬぬ
 水ミヅ下シタく流えて枚ハヒあふのふ
 月ツキ花ハナの風特トクの上ウヘにおたえし
 野ノをさるの福フクのよほをさる
 下シタあけらさきよ流ナガり流ナガり
 山ヤマ山ヤマ休ユり中ナカ月ツキのうらみ
 素ス素ス氏ウヂを女メ房フのうらみ
 下シタをさるく返マゼるさる

此此此此此此

向ひては信と多家ヨキ行儀ありて
後々信後千からしも阿修り
南ナ西シのいふ道をもひと吹フク
いまのお持参を法入をいふ
父母びくつ海もいふあま
る家へ出入ておんそわとや
節ツクの三々引ればは法持ん
持るるもあのかける相井

水 北 水 北 水 北 水

意イといふ奴り後も若奴家
急イ法の急の急ハ何やら
備イ出を次者もいふあの子
らうをぬくいふ法イ持
拘セ北キと交をこせり法イ持
孤イ日ありといふあの子

水 北 水 北 水 北 水

あま

朱枝	十二句
心平水	十二句
万牛	十二句

うきはーそせの梅さくらわ
 花こておもふ事いぬ
 脈ぬくきんやと甘菊
 月あゝいろくの事さ
 うろは後あ人のま
 作字のんういあさ
 作字のんういあさ

其角

千里のわらふみれさ町の野菊
 元稹、杜甫の詩より

花中偏愛^ニ菊^ニ此花^ノ開^ク冬
 更^ニ無^ク花^トと^フる^をを^ぬぬ^まえ
 ち^りの^まの^まの^まの^まの^まの^ま
 幼^ク短^クチ^リチ^リして^古路^のや
 つ^らつ^らあ^らる^るる^るる^るる^るる^る
 不^肖の^まの^まの^まの^まの^ま
 冠^句香^句白^句ふ^んと^りふ^まを
 仕^出して^古事^々々^用ひ^はす
 本^従は^らず^とも^ふと^もと^もと^もと^も
 金^玉色^をも^川て^公良^性を
 あ^やと^もと^もの^まの^まの^まの^ま
 と^さふ^らふ^らふ^らふ^らふ^らふ^ら

か^らん^りも^らる^る點^を用^ゆと
 又^へこ^らら^るる^る金^玉色^をと^あ
 ま^から^ん其^をを^らる^るる^るる^る
 う^まり^て実^をを^けら^るの
 の^飛人^ふを^も言^ます^を用^ひら^ん
 本^従を^とら^るる^るる^るる^るる^る
 い^めへ^らる^るる^るる^るる^るる^る
 了^らず^やる^るる^るる^るる^るる^る
 して^のま^のま^のま^のま^のま^の
 と^まら^るる^るる^るる^るる^るる^る
 芭^蕉門^下の^風を^あし

由つらりと寐る所在懸や竹の梢

惟然

乙、亥、臘の比弊邑より歸の
ありきりなきを言てあしよま
よきくつ伽法するんを更々
海とらまき午時の前眼を
てくは句をいしあしよて
せうまきを案す予孰し吟
の後閑來無事不從容
駐覺東窓日已紅とい
へ風情を思ひよる事
とたたりやと刑心をは

こころをたゞ微かせし
流すりまを眼し次
このまてゆ

路道

次痛抱て願願をかえり
莊子、寓言より、水痛を
さしてこゝろかえりし

以我

沈

海棠の花を海をくちの舟

東風嫺、**沈**山宗光、香霧
而非、夕日轉、廊、只恐、夜深花
睡、去、高燒、銀燭、照、紅

粧といふは東坡居士の吟
 ありとまぬまふりといふは
 狂言はあまといふは
 くーちやうとて言ふも詩
 一多れと海堂の二系は春
 月とて言ふといふも詩

北枝

曉は名をさすはあまの
 小序了る家曉生の時と
 大抵回祿の遊を好むは
 人曉の志をみして聖賢の
 有るふり志のあまをち返して

さとしるはあまの柳道別の
 一見解とて唐の柳子厚
 進士王公をえり失次を加
 多れあまをこそつて見
 北枝も浮雲のいほをい
 とていふ柳列々牆をうり
 たり

半残

初枝はあまの梅の
 僧別命う梅の詩と昔
 曾相々入南華野性
 如人懶泊家毎向東

風_二吟_一薄_二命_一一生不_得近_二梅_一
花_二とある_一をうち_二入_一して
つら_二と_一あ_二ま_一あ_二ま_一比_二自_一
そ_二方_一と_二い_一さ_二ふ_一を_二他_一は_二る_一
の_二々_一あり_二あ_一ま

野

誰_二あ_一り_二い_一ふ_二や_一あ_二の_一梅_二の_一神

馬

馬_二蹄_一今_二去_一テ_二入_一詭_二家_一と

と

い_二ふ_一強_二白_一めて_二作_一ら_二ま_一ま

月

あ_二の_一路_二を_一い_二る_一解_二と_一め_二の_一水
清_二女_一細_二う_一う_二あ_一の_二梅_一の_二影_一

目_二を_一使_二出_一し_二る_一事_二と_一は_二我_一
ぬ_二ま_一て_二作_一を_二出_一し_二る_一自
と_二又_一い_二ふ_一

風

あ_二の_一中_二の_一あ_二も_一う_二け_一ま_二ま_一
つ_二ら_一と_二あ_一ま

去

あ_二の_一中_二の_一あ_二も_一う_二け_一ま_二ま_一
つ_二ら_一と_二あ_一ま

つらりとぬき物尻並や結の風

夏は生み能階の舟の

ふみ色して水のいろよまきん

き午のおもひあておもこつりし

ふといふ秋色を金舟を

そらちてゆきこゝろみくし

こゝろ

つらりとぬき物尻並や結の風

ふりくうけくせもあゝん

目色もておれぬふり

と名位上人のよみ後へ

松風

行六

ふ秋あつとせつあまへめて
つらりとぬき物尻並や結の
句神出さ思は違は心し
都朝の後のあつとせつあ

夕うはねを舞をいろのぬき

夕うはねを舞をいろのぬき
夕うはねを舞をいろのぬき
夕うはねを舞をいろのぬき

芭蕉

しる風も海もちう餅の香

芭蕉

あつたてんてんあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

詩歌の中流物とてをたを
多風句めそゆあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

流色にぬあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

け集みよのふとけりまて

朱松

あふと先あつるよ梅極
 くの流るるおもりの流
 正徳の濟くおとあつて
 せんまを純く菊をぬる
 性のをぬるお陰みよを
 ちとしの仙居をばんと上り

菊人
 松立
 松人
 立人

者流盗むむりのめはる
 先之良のつてあつたにわぬ
 よぬきとぬまのゆふさぬ流の
 まるきをぬるたつてを
 節酒のほり色くと後下を
 秘さぬのむをぬるたつてを
 目をぬるおの暮風の陽り
 片を焼く焼くしは焼くまじ

松立人
 松立人
 松立人
 松立人

掛板

初ふきの雁とてなればし
内佛もとろり空句の相詮
法師の書国ハ他解コキナマス五三志
空カラ合銚カサをといとる作家
へいといともおとさるるの
けふらの日をまわす年梅

出 人 立 人 執業

朱 拙 八 句
菊 人 九 句
充赤鳥鳥 立 九 句
執業 一 句

追加

風園

梅下りの梅なると小盆
 何れもあきふ花のころを
 紫木もも也純家比雛子の啼立
 二日の月のそいふる深泉
 籠とそもまをせぬは荒
 籠のひけりて追ふ出ふ

朱

記

惟

中

ふ

又そとたかふあつ極気新と
 してゆく内儀の余形へゆ
 才五六綱と入身と氣吉
 法者の名をうけ白蓮
 さくくうう三度かきあつて
 物をおもへんやをさ
 はさしい隆子新次と合
 代衣はしして女衣腕と

此
 足
 中
 西
 此
 足
 此

伊予の道に縁の原をいふと
 田舎のつゝおれは果て立休あり
 赤鳥の山神さあり月と
 地の尺えぬほど松葉木と
 名 ちかきお菘のあまのち根市
 茶部句の目おあうてうし
 物まの風名の竹をき焼
 禮とさおまの舞のいし
 水

中 是 松 必 中 松 必 中

葩もさうさうちあたふかおつは
 能のあまのこれの福よぬま
 何もせぬおあまのさう
 新州知らぬや月圓の門
 新うさのさ法をいへおも
 九月の中をてある観音
 うつとれを氣を拵てこれ
 ちかきおまのあまのち根市

中 是 松 必 中 松 必 中

り
ちしく此は強を極めの出物
も歳の子の目利物也
いしくと裏の強飯を指あり
そらのあも花うりあふはあ
大津まて快と流るるの
法に教供するより強を極め
あふ

執筆 中 終 号 終 号

風国 七句

朱松 七句

泥足 七句

惟然 七句

壺中 七句

執筆 一句

道徳ありて菊うぬずるもの
 他をすしとなくしありて日
 物より引連原梅ありて様
 いそぐかきてゆありと東に
 こまよを他流のすしと流
 取ふ事とあふち一陽行か
 け泉へさそものすもあすま
 おもあふ^{一筋}を流るゝと此
 集とまあきとけふ

の方郎朱性
 京寺町二条上井筒屋庄兵衛叔

昭和十年 初秋 鶴岡氏



